

## 国内の畜産物の需給動向

# 牛肉

### 6年4月の牛肉生産量、前年同月比2.7%増

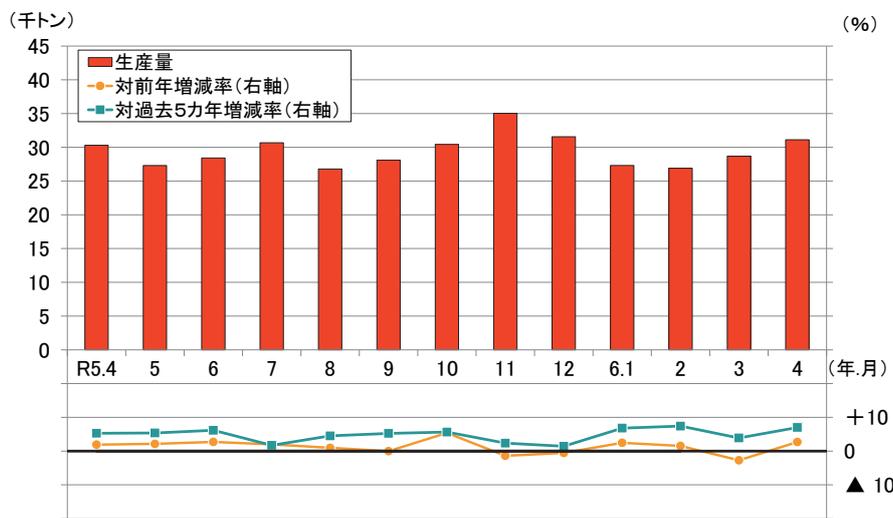
#### 生産量

令和6年4月の牛肉生産量は、3万1124トン（前年同月比2.7%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万5485トン（同6.0%増）、乳用種は7145トン（同7.6%増）と、ともに前年同

月をかなりの程度上回った一方、交雑種は8191トン（同5.5%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較では、7.0%増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

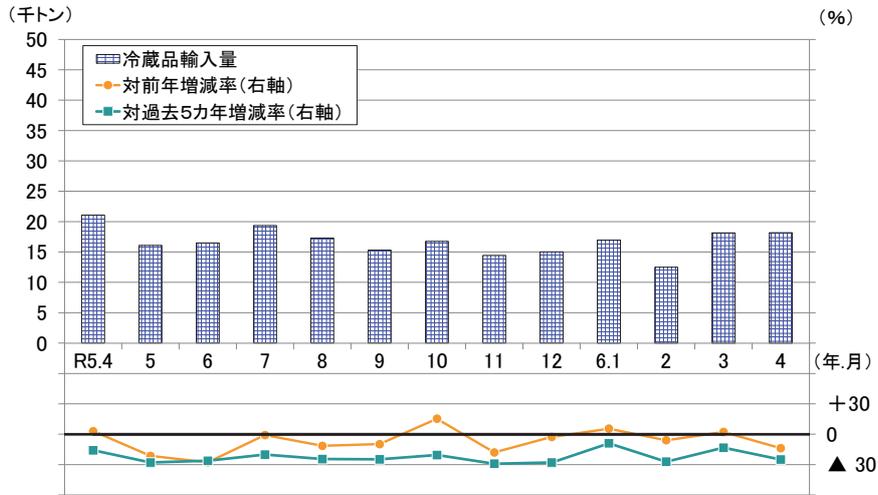
#### 輸入量

4月の輸入量は、国内需要が低迷する中、現地相場の高騰による米国産輸入量の大幅な減少などから、冷蔵品は1万8173トン（前年同月比13.8%減）とかなり大きく、冷凍品は4万5010トン（同3.8%減）とやや、い

ずれも前年同月を下回った（図2、3）。この結果、全体でも6万3202トン（同6.9%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

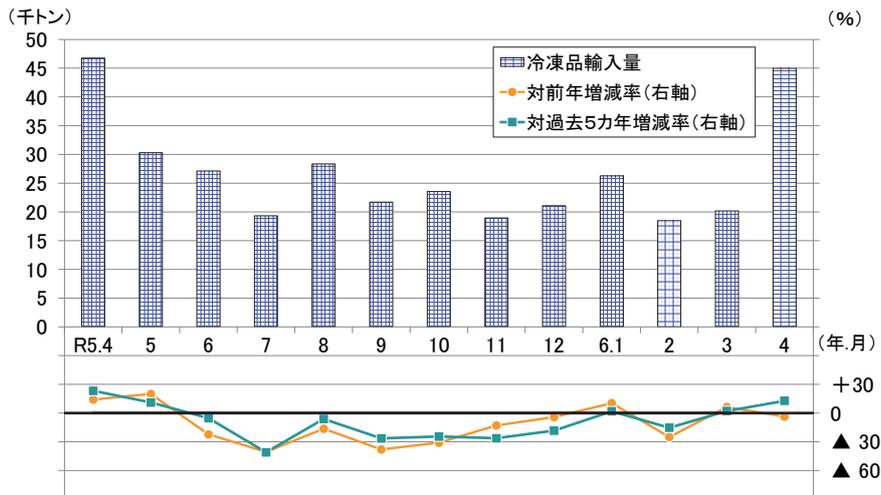
なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は25.0%減と大幅に下回った一方、冷凍品は12.7%増とかなり大きく上回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## 家計消費量等

4月の牛肉の家計消費量(全国1人あたり)は156グラム(前年同月比6.6%減)と前年同月をかなりの程度下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、2.8%減とわずかに下回る結果となった。

4月の外食産業全体の売上高は、物価高騰

が続き、伸び率は前年同月を下回ったものの、花見や歓送迎会需要などにより、前年同月比6.0%増と前年同月をかなりの程度上回った(一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」)。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、割引キャンペーンの集客が従前に及ばなかったものの、高付加価値メニューの好調で同4.3%増と前年同月をやや上回った。また、牛丼店

を含むファストフードの和風も、販促キャンペーンやお得メニューの充実で夕食需要が高まり、同6.7%増と前年同月をかなりの程度上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、前年比で休日数が減少し客数も減少、前年の販促キャンペーンの反動などで、同1.1%減と前年同月をわずかに下回った。

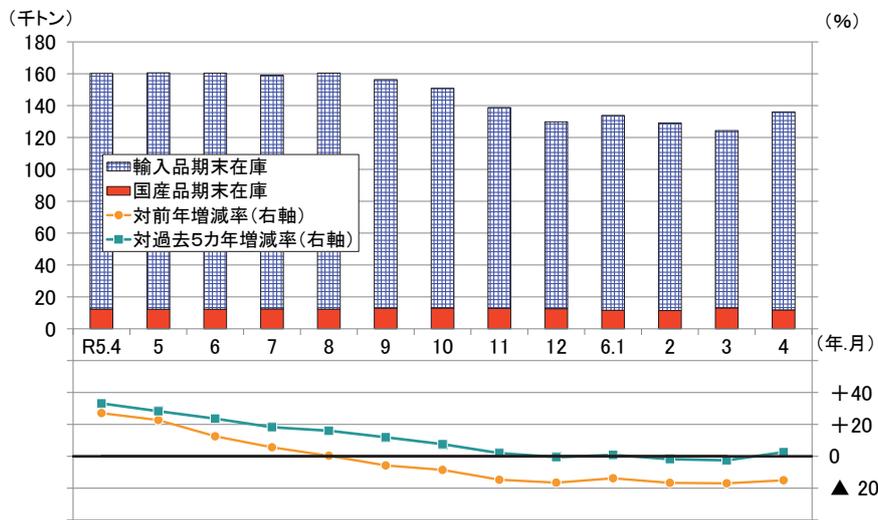
### 推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、13万6045トン

(前年同月比15.1%減)と前年同月をかなり大きく下回った(図4)。このうち、輸入品は12万4210トン(同16.0%減)と前年同月を大幅に下回った。

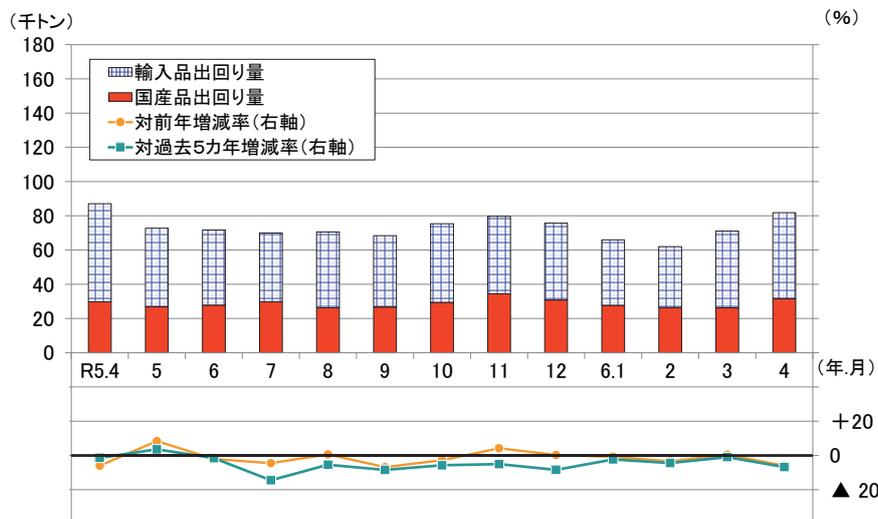
推定出回り量は、8万1839トン(同6.0%減)と前年同月をかなりの程度下回った(図5)。このうち、輸入品は5万221トン(同12.3%減)と前年同月をかなり大きく下回った一方、国産品は3万1618トン(同6.1%増)と前年同月をかなりの程度上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

# 豚 肉

## 6年4月の豚肉生産量、前年同月比7.0%増

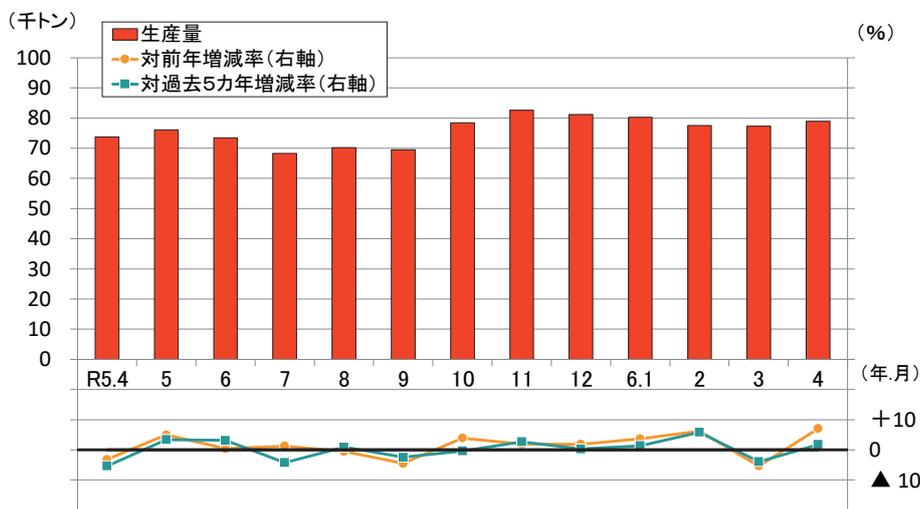
### 生産量

令和6年4月の豚肉生産量は、7万8976トン（前年同月比7.0%増）と前年同月を

かなりの程度上回った（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、1.7%増とわずかに上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

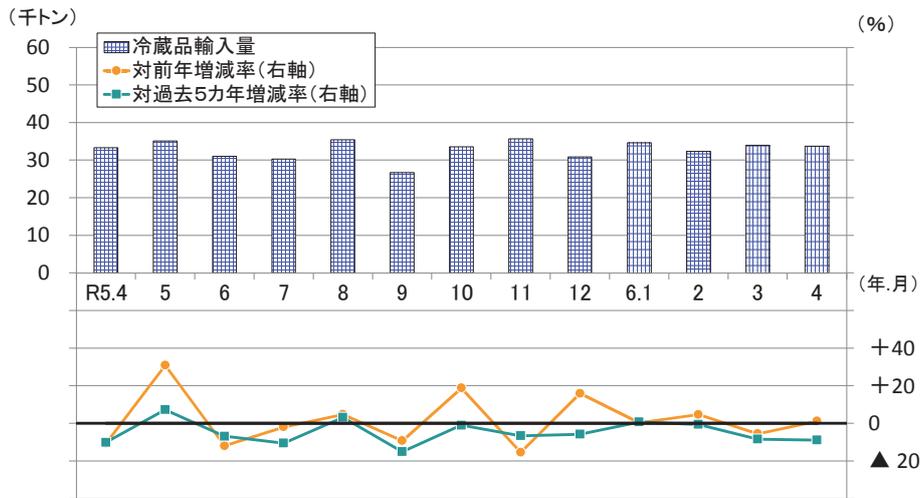
### 輸入量

4月の輸入量は、冷蔵品は、現地相場高の影響から減少が見込まれる米国産の代替としてカナダ産輸入量が増加した他、価格優位性によりメキシコ産輸入量が増加したことなどから、3万3704トン（前年同月比1.2%増）と前年同月をわずかに上回った（図2）。冷凍品は、現地相場高の影響からスペイン産

およびデンマーク産輸入量が減少したことなどから、6万5071トン（同14.7%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図3）。この結果、全体では9万8780トン（同9.8%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

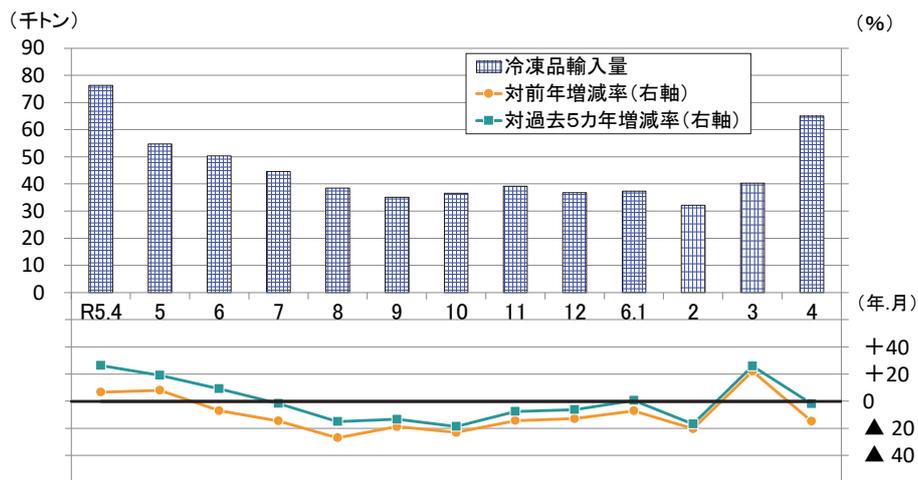
なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は8.9%減とかなりの程度、冷凍品は2.0%減とわずかに、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## 家計消費量

4月の豚肉の家計消費量(全国1人当たり)は、622グラム(前年同月比4.0%減)と前年同月をやや下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、2.8%減とわずかに下回る結果となった。

## 推定期末在庫・推定出回り量

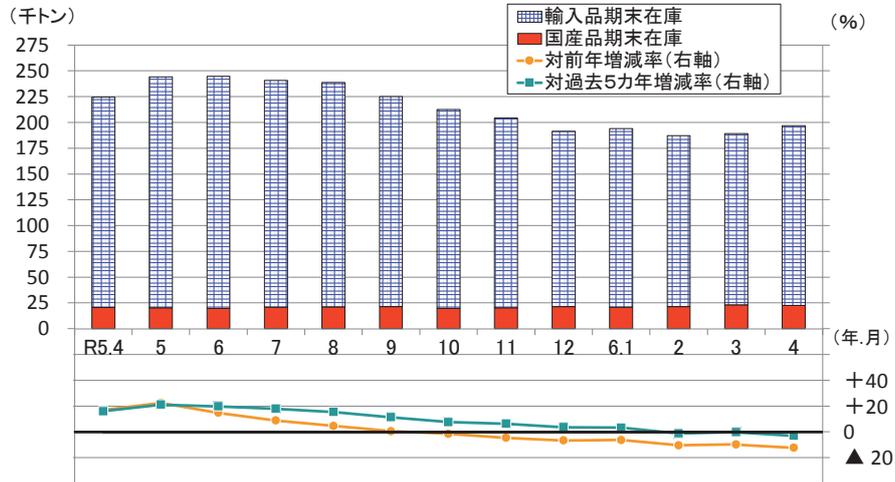
4月の推定期末在庫は、19万6729トン(前年同月比12.4%減)と前年同月をかなり大きく下回った(図4)。このうち、輸入品は、17万4059トン(同14.7%減)と前年同月をかなり大きく下回った。

推定出回り量は、17万158トン(同1.0%増)と前年同月をわずかに上回った(図5)。

このうち、国産品は7万9317トン（同8.2%増）と前年同月をかなりの程度上回った一方、

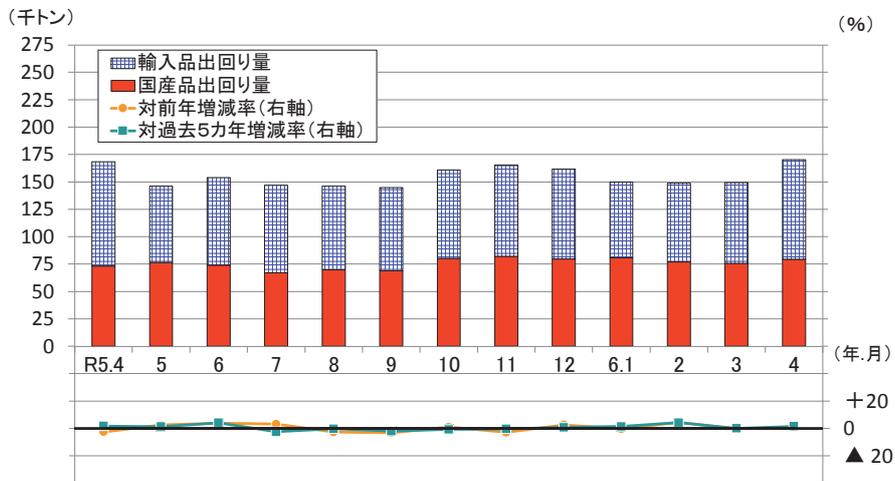
輸入品は9万840トン（同4.5%減）と前年同月をやや下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

# 鶏肉

## 6年4月の鶏肉生産量、前年同月比4.8%増

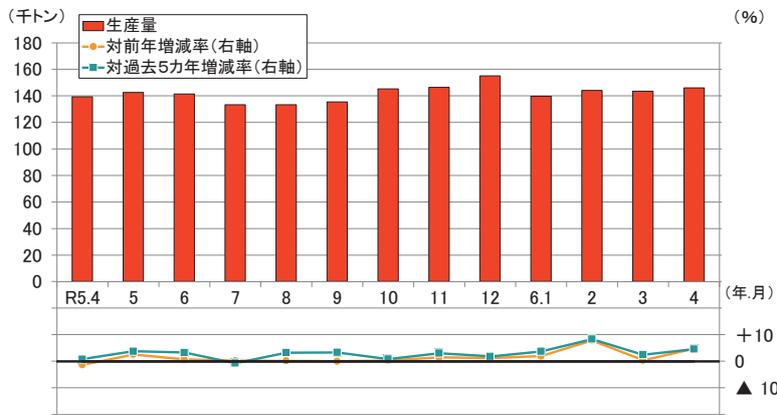
### 生産量

令和6年4月の鶏肉生産量は、14万6033トン（前年同月比4.8%増）と前年同月を

やや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、4.6%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注1：骨付き肉ベース。  
注2：成鶏肉を含む。

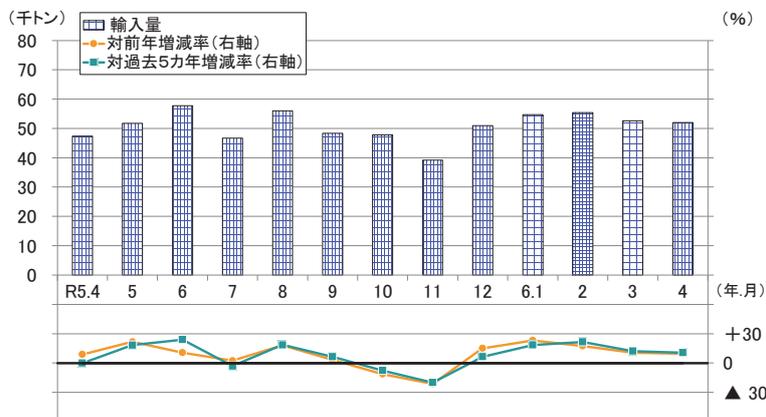
### 輸入量

4月の輸入量は、国内の節約志向を背景とした堅調な鶏肉需要により、ブラジル産、タイ産ともに輸入量が増加したことなどから、

5万2006トン（前年同月比9.7%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、10.6%増とかなりの程度上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

## 家計消費量

4月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)は、524グラム(前年同月比3.3%減)と前年同月をやや下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、1.6%減とわずかに下回る結果となった。

## 推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、16万2563トン

(前年同月比10.5%増)と前年同月をかなりの程度上回った(図3)。このうち、輸入品は12万7057トン(同6.3%増)と前年同月をかなりの程度上回った。

推定出回り量は、20万1454トン(同4.1%増)と前年同月をやや上回った(図4)。このうち、国産品は14万7395トン(同6.2%増)と前年同月をかなりの程度上回った一方、輸入品は5万4059トン(同1.3%減)と前年同月をわずかに下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移

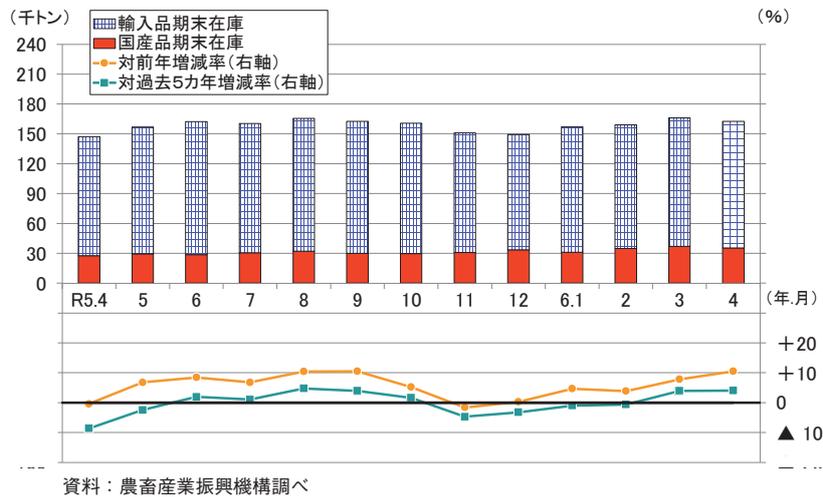
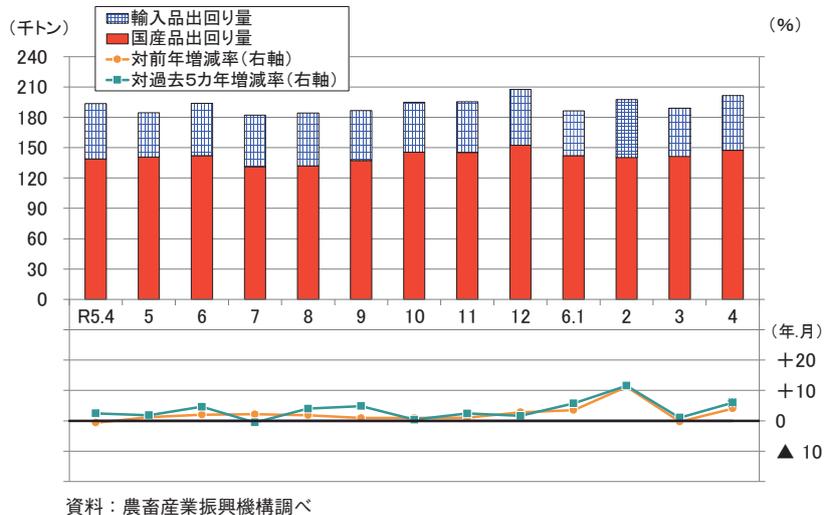


図4 鶏肉出回り量の推移



(畜産振興部 大西 未来)

# 牛乳・乳製品

## 6年4月の北海道の生乳生産量、前年同月を4カ月連続で上回る

### 全国の生乳生産量、前年同月比1.1%増

令和6年4月の生乳生産量は、63万5017トン（前年同月比1.1%増）と前年同月をわずかに上回り、3カ月連続で前年同月を上回った（図1）。地域別に見ると、北海道は35万5575トン（同1.9%増）と前年同月を4カ月連続で上回り、都府県は27万9442トン（同0.0%）と前年同月並みとなった。

図1 生乳生産量の推移



4月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、31万982トン（同1.7%減）と前年同月をわずかに下回った。このうち、業務用向けについては、2万4366トン（同2.6%減）と前年同月をわずかに下回った。

乳製品向けは、32万107トン（同3.9%増）と前年同月をやや上回り、2カ月連続で牛乳

等向けを上回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは、5万9789トン（同1.9%増）と前年同月をわずかに上回り、チーズ向けは、4万1トン（同1.7%減）と前年同月をわずかに下回った。脱脂粉乳・バター等向けは、17万5623トン（同7.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

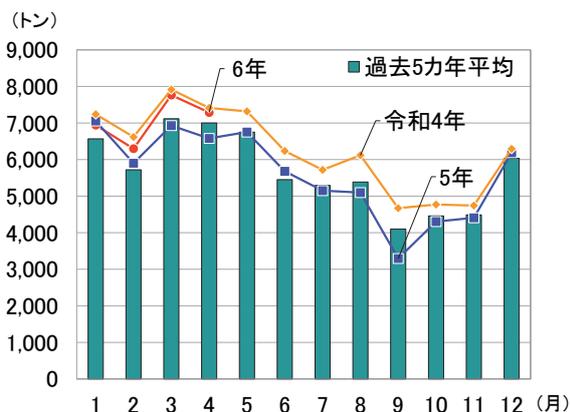
4月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は24万9982キロリットル（同1.2%減）と前年同月をわずかに下回った。成分調整牛乳は1万7988キロリットル（同8.2%減）と前年同月をかなりの程度下回り、加工乳は1万2130キロリットル（同2.5%増）と前年同月をわずかに上回った。

乳製品のうち、クリームは1万190トン（同5.2%増）と前年同月をやや上回った。

### 4月のバター生産量、前年同月比10.8%増

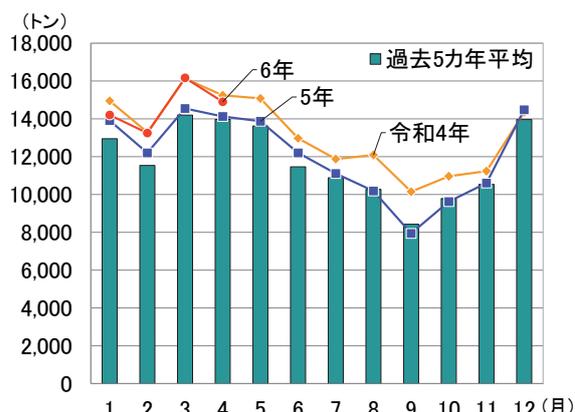
4月のバターの生産量は、7288トン（前年同月比10.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。出回り量は6390トン（同18.0%減）と前年同月を大幅に下回った（農畜産業振興機構調べ）。4月末の在庫量は、2万5945トン（同10.7%減）と前年同月をかなりの程度下回ったが、4カ月連続で前月を上回った（図3）。

図2 バターの生産量の推移



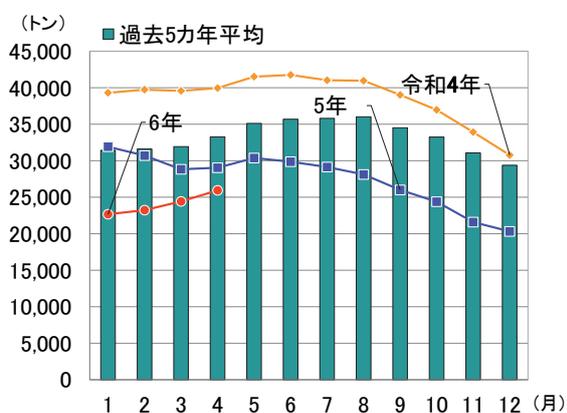
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図4 脱脂粉乳の生産量の推移



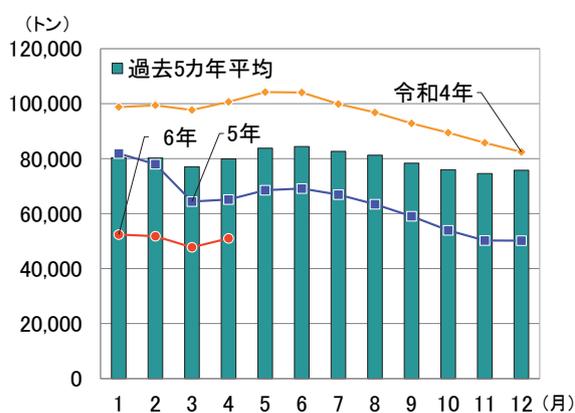
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図3 バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

## 4月末の脱脂粉乳在庫量、前年同月比21.9%減

4月の脱脂粉乳の生産量は、1万4900トン（前年同月比9.4%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。出回り量は1万1684トン（同9.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った（農畜産業振興機構調べ）。4月末の在庫量は、5万996トン（同21.9%減）と前年同月を大幅に下回ったが、4カ月ぶりに前月を上回った（図5）。

## 6年度の生乳生産量、前年度比1.2%増の見込み

一般社団法人Jミルクは令和6年5月31

日、「2024年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」を公表した（表）。これによると、6年度の生乳生産量は741万3000トン（前年度比1.2%増）と前年をわずかに上回る見込みである。地域別に見ると、北海道では生産抑制を避ける方針が示されたこともあり、427万9000トン（同2.5%増）と3年ぶりに増産となる見込みとなった。一方で、都府県では313万4000トン（同0.5%減）と3年連続で減産となる見込みとなっている。

牛乳類の生産量の見通しは、飲用需要の低迷などにより、445万5000キロリットル（同1.5%減）となっており、内訳を見ると、牛乳は306万1000キロリットル（同0.7%減）、

表 生乳生産量の見通し

(単位：千トン)

	全国		北海道		都府県	
	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)
令和3年度	7,647	2.9%	4,311	3.7%	3,335	1.8%
4年度	7,533	▲1.5%	4,254	▲1.3%	3,279	▲1.7%
5年度	7,324	▲2.8%	4,175	▲1.9%	3,149	▲4.0%
6年度 (見通し)	7,413	1.2%	4,279	2.5%	3,134	▲0.5%

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」（令和3～5年度）、一般社団法人Jミルク「2024年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」（5月31日公表）（令和6年度）

注：令和3～5年度は実績値、6年度は見通しである。

加工乳は15万3000キロリットル（同4.8%増）、成分調整牛乳は21万7000キロリットル（同6.9%減）、乳飲料は102万4000キロリットル（同3.5%減）、はっ酵乳は97万3000キロリットル（同1.6%減）となっている。

乳製品向け処理量は、351万3000トン（同4.0%増）と前年をやや上回る見込みとなった。品目別に見ると、脱脂粉乳・バター等向けは184万7000トン（同7.0%増）、チーズ向けは43万8000トン（同2.3%増）、生クリーム等向けは122万9000トン（同0.4%増）といずれも前年度を上回る見込みとなった。

脱脂粉乳の期末在庫量は、飲用需要の低迷などにより、在庫対策を除いた場合は8万4400トン（同76.7%増）、在庫対策を考慮した場合であっても6万5100トン（同36.4%増）と前年度を大幅に上回る見込みである。一方、バターの期末在庫量は2万4800トン（同1.7%増）と前年度をわずかに上回る見込みであるが、単年度で見ると需要量が供給量を上回る状況となっている。

### チーズ購入時に国産を意識する消費者、3割強

農林水産省は令和6年5月10日に「国産

チーズの消費拡大に関する意識・意向調査結果」を公表した。本調査は、6年1月中旬から2月中旬にかけて実施され、消費者2000人およびチーズ製造事業者151経営体から回答を得た。

同調査のうち消費者を対象とした調査結果によると、チーズ購入時に国産であることへの意識について、全体の32.9%が「ラベルや食品表示を見て国産のチーズを購入するように意識している」と回答する一方で、「生産国は意識していない」と回答した割合は59.7%と全体の半数を上回る結果となった。

国産チーズを購入する理由については、「安心感があるから」と回答した割合が80.5%で最も多く、次いで「美味しいから」が48.2%、「添加物が少ないから」が23.0%、「価格が安いから」が22.5%となった。国産チーズを購入する・食べる機会を増やすために重要なものについては、全体の67.6%が「おいしさ」と回答し、次いで「低価格」が52.8%、「入手しやすさ」が30.9%、「添加物の少なさ」が24.8%となった。

(酪農乳業部 山下 侑真)

# 鶏卵

## 6年5月の鶏卵卸売価格、前年同月比41.7%安

### 卸売価格

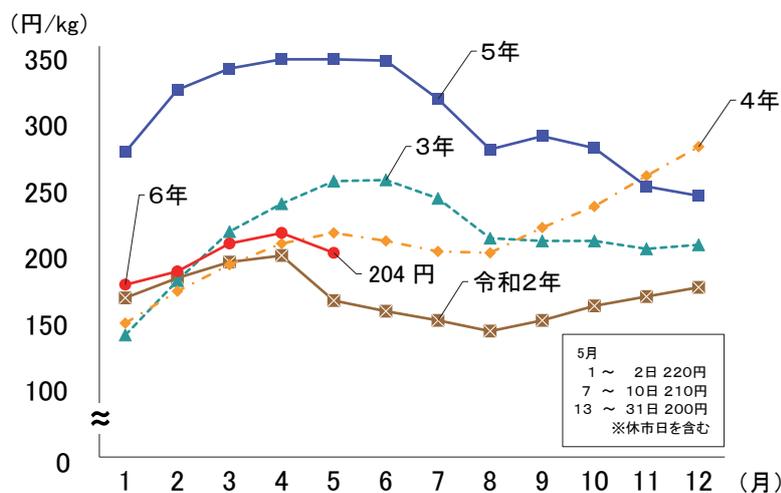
令和6年5月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり204円（前年同月差146円安、前年同月比41.7%安）と高値で推移した前年同月を大幅に下回った（図1）。なお、日ごとの推移を見ると、同価格は、月初の同220円から7日に同210円、その後、13日から末日までは同200円に下落し、月間下落幅は同20円となった。

このような中、一般社団法人日本養鶏協会は5月13日、同日時点の鶏卵の標準取引価格（日ごと）が、安定基準価格（同202円）を下回る同195円になったことから、成鶏更新・空舎延長事業<sup>(注)</sup>を発動したことを公表した。同事業の発動は、2月に次いで今年2回目である。

供給面については、令和4年シーズンの高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）発生農場において、採卵鶏の再導入が進んでいることなどから引き続き回復傾向がみられている。一方、需要面については、連休中の行楽需要が一定程度あったものの、加工・業務向けの令和4年シーズンのHPAI発生による鶏卵不足の影響が続いており、需要の回復が遅れている状況にある。

（注）鶏卵生産者経営安定対策事業の一つであり、一般社団法人日本養鶏協会が実施する事業。同事業は、鶏卵の標準取引価格（日ごと）が安定基準価格を下回った日の30日（10万羽未満の生産者は40日）前から標準取引価格（日ごと）が安定基準価格を上回る日の前日までに、更新のために成鶏を出荷し、その後60日以上の空舎期間を設けた生産者に対して奨励金を交付するものである。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」  
注：消費税を含まない。

## 家計消費量

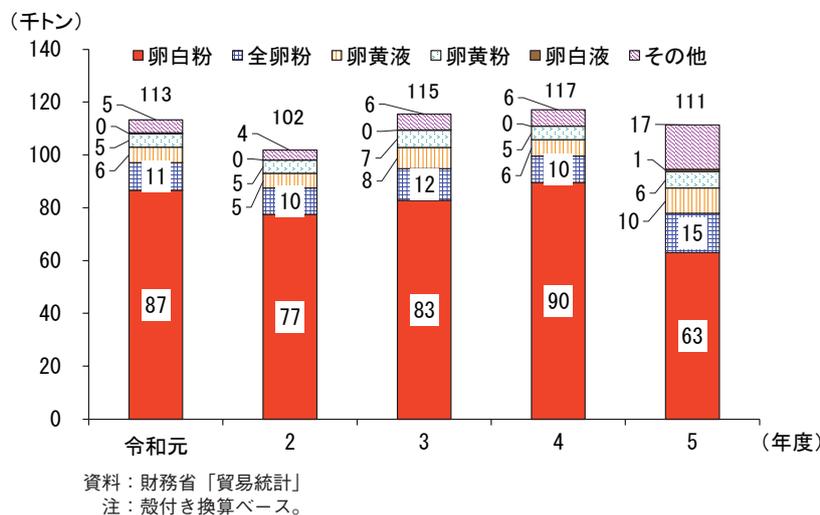
4月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）は、876グラム（前年同月比3.6%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、6.4%減とかなりの程度下回る結果となった。

## 輸入量

令和5年度の鶏卵（<sup>ふか</sup>孵化用除く）輸入量（殻付き換算）は、11万1290トン（前年度比4.9%減）となった（図2）。前年度および前々年度は鶏卵需給がひっ迫したことから輸入量が多かったものの、国産鶏卵の供給の回復などから、前年度を下回った。

図2 鶏卵輸入量の推移



（畜産振興部 大西 未来）

# 令和5年度食肉流通統計・令和5年食鳥流通統計調査結果

農林水産省が公表している畜産物流通調査のうち、本稿では、「食肉流通統計」（令和5年4月～6年3月）<sup>（注1）</sup>より成牛（和牛、交雑牛、乳牛）および豚のと畜頭数、主要市場<sup>（注2）</sup>における卸売価格および取引頭数について、また、「令和5年食鳥流通統計調査結果」（令和5年1～12月）<sup>（注3）</sup>より食鳥の処理羽数および重量について報告する。

（注1）令和5年4月～6年3月の月別データ（速報値）を機構にて集計。

（注2）中央卸売市場および地方卸売市場を指す。「中央卸売市場」は、卸売市場法（昭和46年法律第35号）の規定により開設されている仙台、さいたま、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、広島および福岡の10市場。「地方卸売市場」は、卸売市場法の規定により開設されている地方卸売市場のうち、畜産経営の安定に関する法律（昭和36年法律第183号）第3条第1項の標準的販売価格の算出に用いられる市場をいい、茨城、栃木、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出および佐世保の15市場。

（注3）速報値。

## 【牛肉】

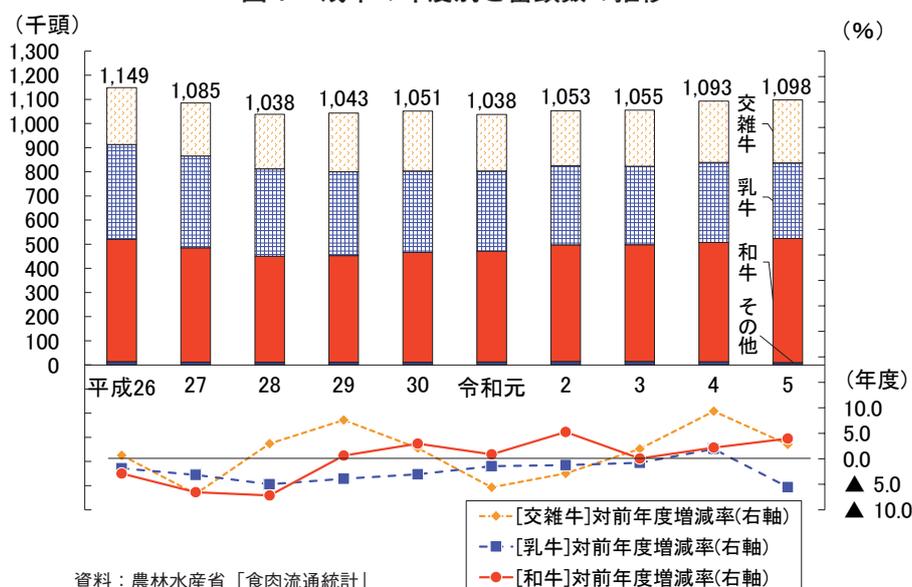
### 成牛のと畜頭数、和牛と交雑牛の増加により4年連続の増加

令和5年度の成牛のと畜頭数は、109万7847頭（前年度比0.5%増）と、前年度をわずかに上回り、4年連続の増加となった（図1）。

品種別に見ると、和牛は、51万3964頭（同4.0%増）と前年度をやや上回り、7年連続の増加となった。交雑牛は、26万801頭（同2.8%増）と前年度をわずかに上回り、3年

連続の増加となった。一方、乳牛は、31万3178頭（同5.6%減）と前年度をやや下回り、11年ぶりの増加となった前年度から一転、再び減少となった。和牛については、生産基盤強化対策の実施による繁殖雌牛の増加、交雑牛については、乳用雌牛への黒毛和種精液の利用などにより増加が見られている。なお、と畜頭数全体に占める各品種の割合は、和牛が46.8%、交雑牛が23.8%、乳牛が28.5%となり、和牛の割合が最も大きい結果となった。

図1 成牛の年度別と畜頭数の推移



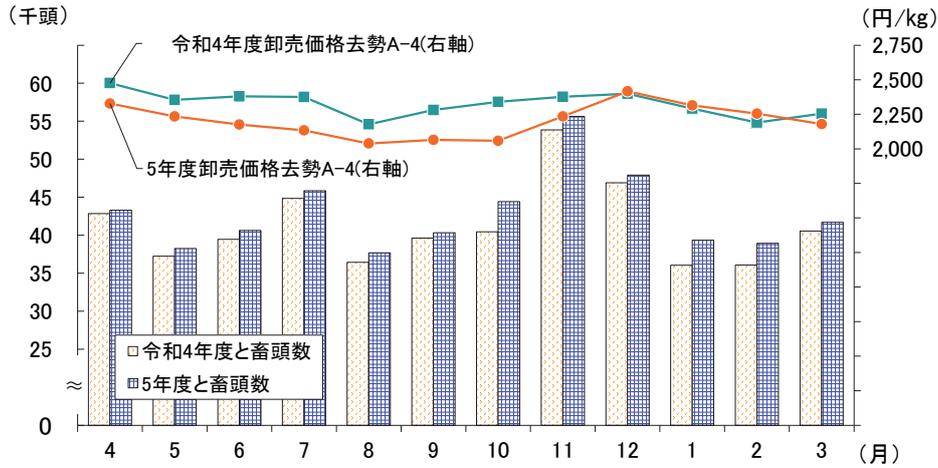
### 和牛の卸売価格、年末年始を除き前年割れで推移

令和5年度の和牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、11月の5万5627頭（前年同月比3.3%増）、次いで12月の4万7899頭（同2.1%増）、7月の4万5855頭（同2.3%増）の順となった（図2）。和牛のと畜頭数は、例年、最需要期の年末に向けてピークを迎える他、春のお祝い需要、お盆

などの時期に増加する傾向がある。

月別の卸売価格（東京、去勢A-4）を見ると、12月～6年2月を除き前年同月を下回った。物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりの影響から、小売り向けの引き合いが弱まったことなどが要因として考えられる。なお、最も高かったのが12月の1キログラム当たり2416円（同0.7%高）、最も安かったのが8月の同2039円（同6.4%安）となった。

図2 和牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移

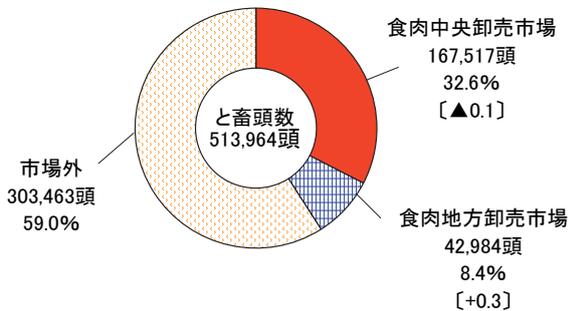


資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社  
注：消費税を含む。

和牛の主要市場における市場経由率<sup>(注4)</sup>を見ると、食肉中央卸売市場が32.6%（16万7517頭）と前年度より0.1ポイント低下し、食肉地方卸売市場は8.4%（4万2984頭）と前年度より0.3ポイント上昇した（図3）。この結果、全体では41.0%（21万501頭）と前年度より0.2ポイント上昇した。

(注4) 卸売市場における取引成立頭数が、全と畜頭数に対して占める割合。なお、取引成立頭数は、卸売市場への上場頭数のうち、卸売業者と売買参加者との間に取引が成立した頭数。

図3 令和5年度 和牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：〔 〕は対前年度増減率。

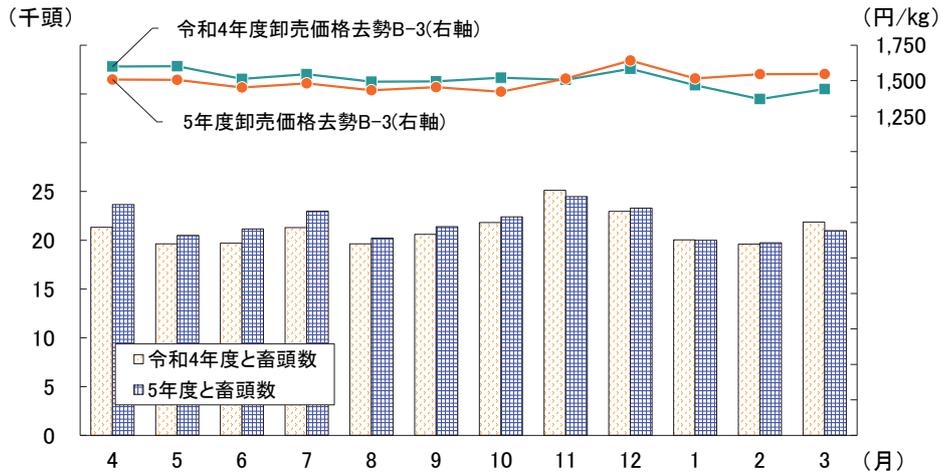
### 交雑牛の卸売価格、4～10月までは前年割れで推移

令和5年度の交雑牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、11月の2万4475頭（前年同月比2.6%減）、次いで4月の2万3657頭（同10.9%増）、12月の2万3301頭（同1.5%増）の順となった（図4）。

月別の卸売価格（東京、去勢B-3）を見ると、4～10月までは前年同月を下回った。なお、最も高かったのが12月の1キログラム当たり1642円（同3.7%高）、最も安かったのが10月の1422円（同6.5%安）となった。

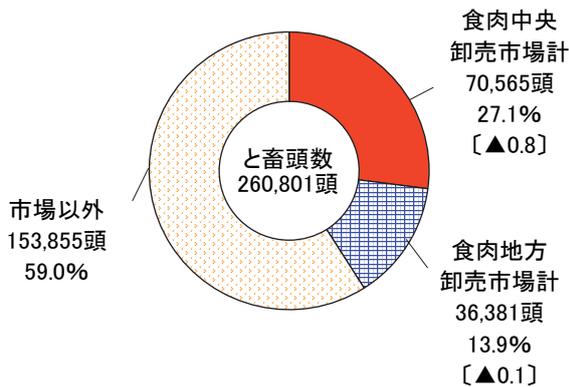
交雑牛の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は27.1%（7万565頭）と前年度より0.8ポイント低下し、食肉地方卸売市場も13.9%（3万6381頭）と前年度より0.1ポイント低下した（図5）。この結果、全体では41.0%（10万6946頭）と前年度より0.9ポイント低下した。

図4 交雑牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社  
注：消費税を含む。

図5 令和5年度 交雑牛の市場経由率



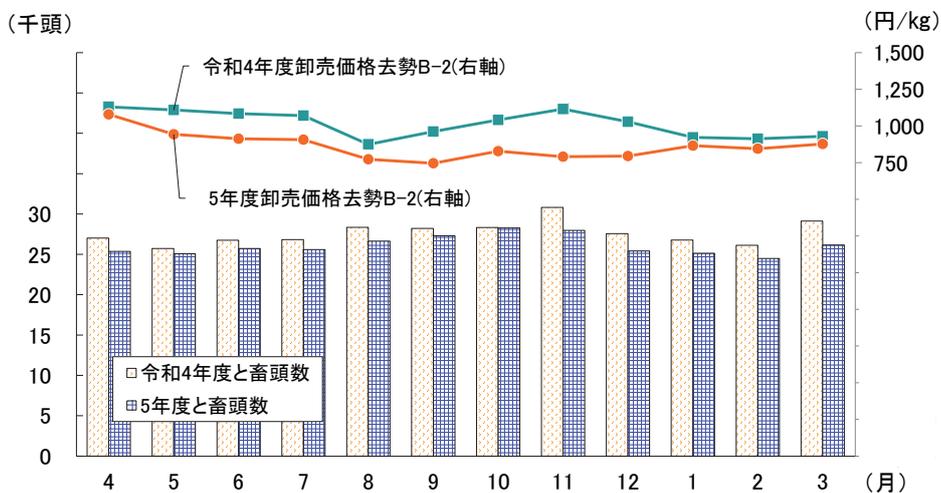
資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：〔 〕は対前年度増減率。

### 乳牛のと畜頭数および卸売価格、1年を通して前年同月を下回る

令和5年度の乳牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、10月の2万8278頭（前年同月比0.2%減）で、次いで11月の2万7963頭（同9.3%減）、9月の2万7305頭（同3.2%減）の順となり、1年を通して前年同月を下回った（図6）。

月別の卸売価格（東京、去勢B-2）を見ると、1年を通して前年同月を下回った。なお、最も高かったのが4月の1キログラム

図6 乳牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移

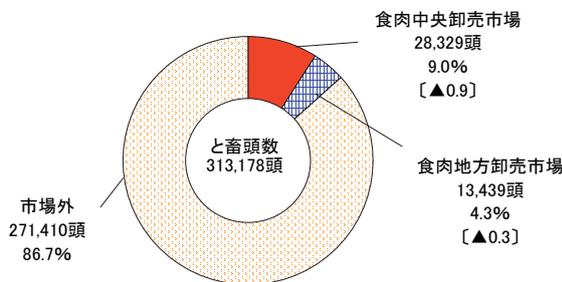


資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社  
注：消費税を含む。

当たり1079円（同4.6%安）、最も安かったのが9月の同746円（同22.5%安）となった。

乳牛の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は9.0%（2万8329頭）と前年度より0.9ポイント低下し、食肉地方卸売市場も4.3%（1万3439頭）と前年度より0.3ポイント低下した（図7）。この結果、全体では13.3%（4万1768頭）と前年度より1.2ポイント低下した。

図7 令和5年度 乳牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：〔 〕は対前年度増減率。

## 【豚肉】

### 豚のと畜頭数、2年連続で減少

令和5年度の豚のと畜頭数は、1640万1218頭（前年度比0.5%減）と前年度をわずかに下回った（図8）。近年、おおむね

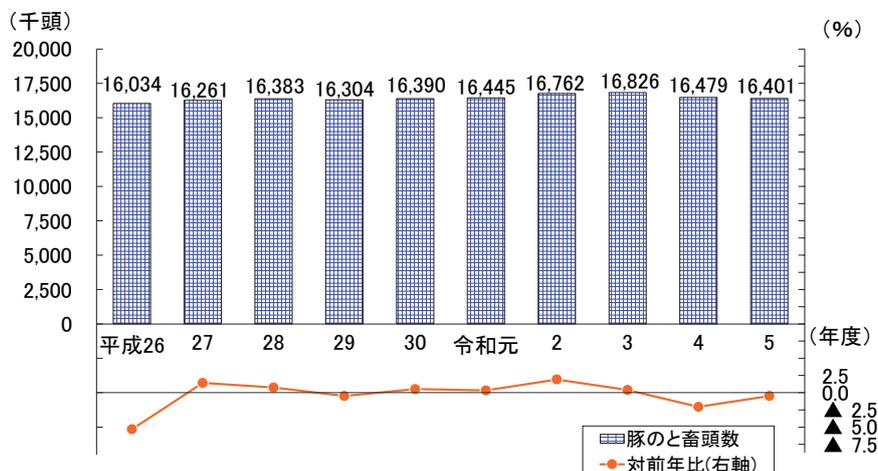
増加傾向で推移していたものの、小規模の飼養者層を中心とした廃業などによる飼養頭数の減少などから、4年度に続き、5年度も減少となった。

5年度の豚のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、11月の148万3301頭（前年同月比0.0%減）、次いで12月の146万1938頭（同0.1%減）、10月の143万7125頭（同3.3%増）の順となった（図9）。

月別の卸売価格（東京、上）を見ると、4月～9月、6年2月は前年同月を上回った。高騰する輸入品の代替需要に加え、比較的高価な牛肉からの需要のシフトなどが要因として考えられる。なお、最も高かったのが8月の1キログラム当たり710円（同10.2%高）、最も安かったのが1月の同492円（同7.2%安）となった。

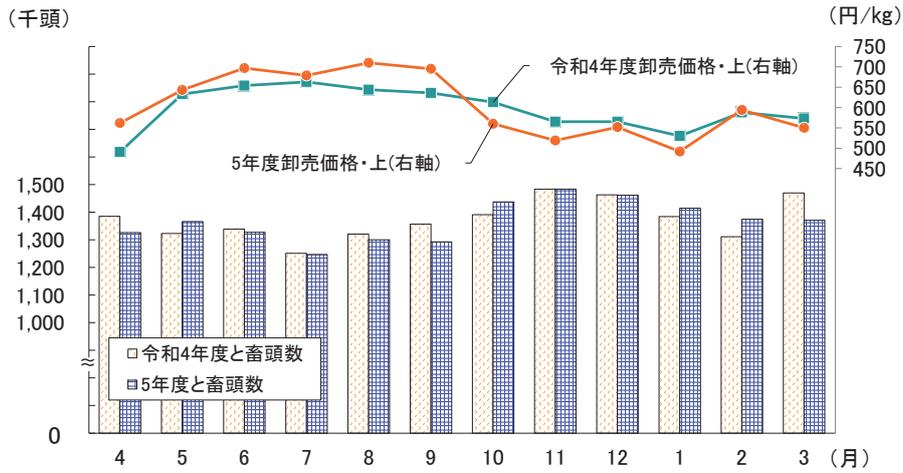
豚の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は5.3%（87万1377頭）と前年度より0.1ポイント低下し、食肉地方卸売市場は6.8%（112万1596頭）と0.2ポイント低下した（図10）。この結果、全体でも12.2%（199万2973頭）と0.1ポイント低下した。

図8 豚の年度別と畜頭数の推移



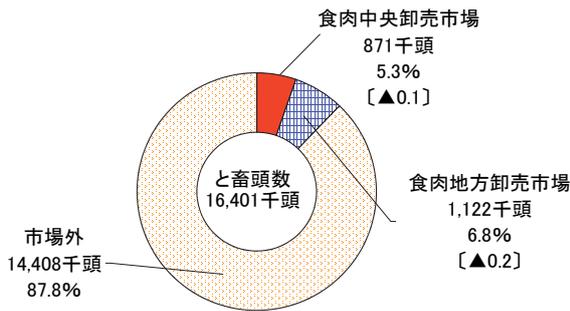
資料：農林水産省「食肉流通統計」

図9 豚の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社  
注：消費税を含む。

図10 令和5年度 豚の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注1：[ ] は対前年度増減率。  
注2：端数処理の関係から合計と内訳は一致しない。

## 【鶏肉】

### 肉用若鶏の処理重量、増加傾向で推移

令和5年（1～12月）の食鳥処理羽数<sup>(注5)</sup>は、8億2174万9000羽（前年比0.0%増）と前年並みとなった。また、食鳥処理重量<sup>(注6)</sup>は、238万4255トン（同0.5%増）と前年をわずかに上回った。

種類別に見ると、全体の約9割を占める「肉用若鶏（ふ化後3カ月齢未満）」は、処理羽

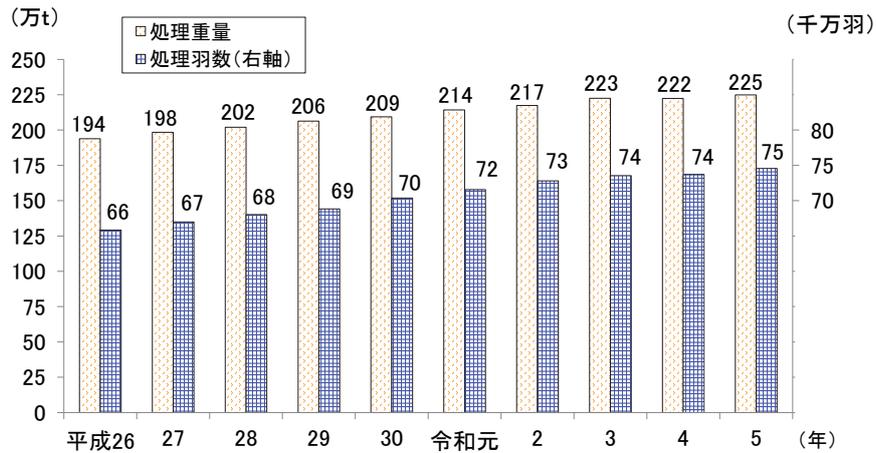
数が7億4563万6000羽（同1.1%増）、処理重量が224万9259トン（同1.1%増）と、いずれも前年をわずかに上回った（図11）。消費者の健康志向の高まりや根強い国産志向による堅調な需要が継続しており、近年増加傾向で推移している。

全体の1割を占める「廃鶏（採卵鶏または種鶏を廃用した鶏）」は、処理羽数が7491万6000羽（同10.1%減）、処理重量が13万1546トン（同8.7%減）と、いずれも前年をかなりの程度下回った（図12）。

その他の地鶏などが含まれる「その他肉用種<sup>(注7)</sup>（ふ化後3カ月齢以上）」は、処理羽数が119万7000羽（同1.1%増）、処理重量が3450トン（同1.0%増）と、いずれも前年をわずかに上回った（図13）。

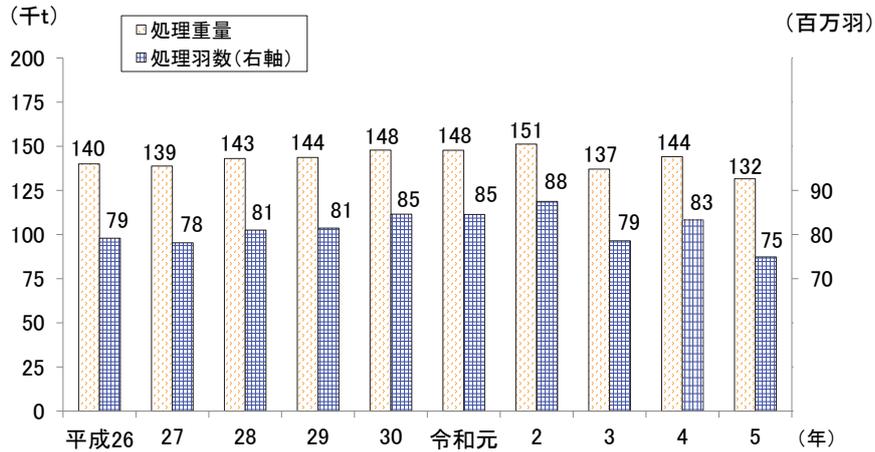
(注5) 調査対象は年間食鳥処理羽数30万羽超の食鳥処理場。  
(注6) 食鳥処理場が肉用目的で処理した生体の重量。  
(注7) ふ化後3カ月齢以上の鶏。地鶏や銘柄鶏が含まれる。

図11 (肉用若鶏) 食鳥処理重量および処理羽数の推移



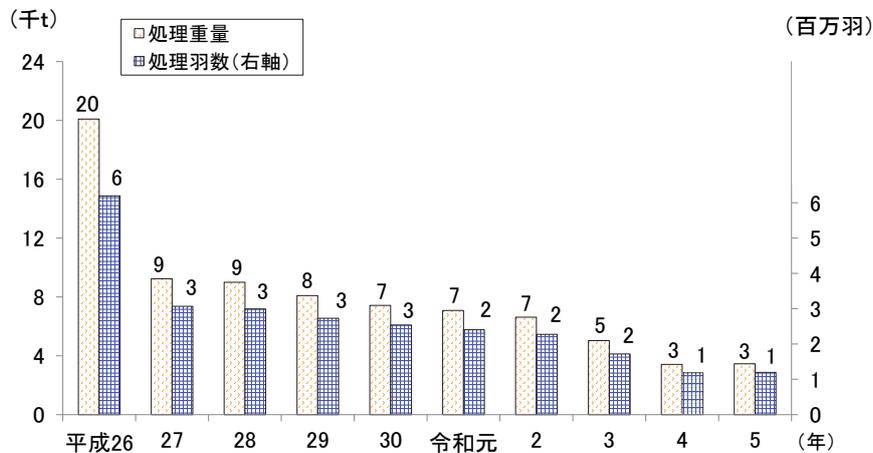
資料：農林水産省「食鳥流通統計調査」

図12 (廃鶏) 食鳥処理重量および処理羽数の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計調査」

図13 (その他の肉用鶏) 食鳥処理重量および処理羽数の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計調査」

(畜産振興部 小森 香穂)